

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 16 日現在

機関番号：32616

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885080

研究課題名(和文)米国の学習障害研究蓄積に基づくRTIの再評価

研究課題名(英文) Re-evaluation of RTI from the perspective of Learning Disabilities Studies in the U.S.A.

研究代表者

羽山 裕子 (Hayama, Yuko)

国土館大学・文学部・講師

研究者番号：20737192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アメリカ合衆国の学習障害児支援システムであるRTIについて、過去の学習障害をめぐる言説をふまえて、その意義と課題を再検討することを目指した。まず、アメリカにおいて学習障害児への公的な教育が充実していく1970年代後半～80年代の雑誌論文を調査し、中西部の大学や地域教育局において先進的な研究や実践が行われていたことがわかった。そこで次に、その関係者らの現在のRTIに対する立場を調査した。その結果、LDサミットやRTIシンポジウムといった、RTIに関する初期の全米的な意見集約の場に複数の関係者が参加しており、いずれもRTI支持の立場から主張を展開していることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the characteristics of Response to Intervention by comparing them to the past representative studies and practices. First, I reviewed articles in 1970s-80s, and revealed that the representative studies and practices had been conducted in some mid-western states. Then, I clarified the main persons of each studies and practices. After that, I examined what these persons said to Response to Intervention. Then, I identified that some of them were invited to the major conferences which had big impact on introduction of Response to Intervention, such as LD summit(2001) and RTI symposium(2003); and clarified that almost all of them stated the usefulness of Response to Intervention and supported the introduction of that.

研究分野：教育方法学、特別支援教育

キーワード：学習障害 アメリカ合衆国 Response to Intervention Learning Disabilities

1. 研究開始当初の背景

学習障害 (Learning Disabilities) は 2007 年より開始された特別支援教育のもとで、通級による指導の対象として位置づけられており、その指導方法に関する書籍も多数出版されている。しかしながら、そもそもどの子どもが「学習障害児」であるのかを早期に識別することは容易ではない。そのため、障害に気づかれないまま学業における失敗経験が積み重なり、深刻な二次障害が生じてしまうという問題がある (窪島、2010)。

これに対してアメリカ合衆国 (以下、アメリカ) では、学校現場において学習障害児を早期に発見し適切な対応へと導くためのシステムである Response to Intervention (以下、RTI) が 2004 年の障害児教育法改訂を機に全国的に普及している。筆者はこの RTI の理念と現実を読み解くことが、学習障害の早期支援をめぐる論点の明確化、とりわけ、学校が担いうる役割とその限界を明らかにすることにつながると考え、これまで研究を進めてきた。

現在 RTI については、データに基づいて効果を実証した研究が発表される一方で、当初期待されていたような学習障害を識別 (identify) する機能は弱いことを指摘する研究も発表されるなど、評価が一樣ではない。また、そもそもの前提として、RTI はその具体的な姿が一つに規定されておらず、RTI を名乗る実践間でも様々な性格の相違が予想されるという問題もある。このような事態をふまえて本研究では、現在の RTI の在り方のみに注目して RTI の意義や課題を論じることの限界を自覚し、RTI というシステムの導入が求められるに至った背景をいま一度吟味することで、新たな視点から RTI を検討したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、RTI が学習障害研究の歴史の中でどのような位置を占め、今後の学習障害児教育をどのように発展させていくものなのかを明らかにすることである。そのため、現在の RTI に関する様々な主張とその背景理論や立場を整理することを目指す。その際、アメリカの学校教育において学習障害児支援が正式に位置づけられていった、1970 年代後半以降の研究や実践とのつながりにも留意する。

3. 研究の方法

本研究においては、現在の RTI 研究を過去とのつながりという視点から再検討することと、RTI 導入以前の学習障害研究における代表的な論点や人物を明らかにするという二つの作業を行ったうえで、それらをふまえて、RTI がアメリカの学習障害児教育をめぐる議論の流れにどのように位置づくのかを考察することを目指した。具体的には、研究の軸として 1) RTI 支持派の代表的な論者で

あるフクスら (Fuchs, D. & Fuchs, L.S.) の主張が、どのような理論的立場に依拠しているのかを明らかにする。2) 学習障害研究の主要な立場を明らかにし、各立場が RTI に対してどのような姿勢を示しているのかを明らかにする。3) RTI に対する批判的な主張の分析および、実践において見られる理論からの乖離の実態を分析することを通して、RTI のオルタナティブの在り方について探るの三つを想定していた。

平成 26 年度には、現在から過去へと遡るアプローチで研究を進めた。具体的には、まず RTI 導入後の現在の代表的な論者や論点を絞るため、障害児教育関連学術誌の網羅的な調査に取り組んだ。さらに、そこで数多く論考を発表している論者について、*Education Index* を手がかりに、過去にどのような研究に取り組んでいたのかを探った。

平成 27 年度には、過去の取り組みから現在を展望するアプローチで研究を進めた。具体的には、1970~90 年代のアメリカにおける学習障害の早期発見や早期対応を目指した研究や実践について、渡米による資料収集も行いながら調査した。また、そこでの中心的な人物、文献、キーワード等が、2000 年以降の RTI 研究にどのように出現するのかを調べた。さらに、特に RTI 導入直前の時期については、多様な立場の代表的な論者が共通するテーマについて意見を出し合う場である学術会議に注目し、論点や論者の立場の整理を試みた。

4. 研究成果

研究の結果、以下のような点が見出された。

(1) 過去の取り組みの継承

フクスらの多岐にわたる研究成果のうち、学習障害関連の早期のものとしては、ミネソタ大学学習障害研究所において取り組まれていた研究プロジェクト (1978-1983) に関わっていたことが確認された。同プロジェクトの成果は、イセルダイク (Ysseldyke, J.) による学習障害と低学力との類似性の主張につながっており、この主張はアメリカの学習障害児教育に大きな影響を与えている (干川、2000)。また、同プロジェクトの一員であったデノ (Deno, S.) は、従来の学習障害児識別のための心理検査とは異なる、継続的に繰り返し子どもの読み書き能力を測定するための測定方法である curriculum-based measurement (以下、CBM) を発展させ、これは現在の RTI 実践においても用いられている。

このように、ミネソタ大学の研究プロジェクトは学習障害児への対応のうち、とりわけその識別に関連する部分について、通常の読み書き困難への対応との連続性を見出す契機を持つものであり、そこに関わったフクスらにおいても、20 世紀前半以前よりの病理学的な方向から学習障害の特質や対応を解明しようとする立場とは、一線を

画する学習障害観を形成していたことが予想された。ただし、プロジェクトの成果のうちフクスらが中心に関わった部分の詳細を検討することは今後の課題として残された。

(2) 学習障害識別機能に対する疑義

RTI 普及の契機となった 2004 年の障害者教育法改訂以前の議論において、RTI に対してどのような批判的見解が示されていたのかを整理したところ、2003 年に開催された RTI シンポジウムの時点で既に、RTI による学習障害識別に対する疑問が複数出されていたことが明らかとなった。また、これら疑問を示した論者たちの主張する、RTI 以外の望ましい学習障害識別方法について分析を行った結果、学習障害の生理学的、神経学的基盤に関する知見の尊重が求められていることが見出された。

さらに、導入以前より RTI による学習障害識別に対して肯定的な見解を示していた論者の 2010 年代以降の論考を検討したところ、中等教育段階の生徒を対象とした RTI について支持する主張が見られ、そこにおいては RTI による学習障害の早期の識別への期待は見られなかった。この点からは、RTI という名称でくくられる取り組みが多様化する中で、学習障害の識別に重きを置かないものが存在しており、それは RTI 支持者によっても是認される場所のものであることが判明した。

(3) 支援提供システムとしての側面への期待

学習障害識別機能への期待が薄れながらも、RTI が広く全米に普及している点を受け、そこに新たに何が期待されているのかを分析した。その結果、学習障害児支援とは異なる目的を持つ機関によって、RTI の活用を論じる冊子等が発行されていることがわかった。そこで期待が示されていたのは、中等教育段階の生徒を対象とした RTI であった。

具体的には、No Child Left Behind 法の理念実現を目指す機関や、高校教育の改善を目指す機関によって、読み書きの基礎的な部分でのつまずきにとどまらず出席不良や学力不足なども視野に入れて、RTI という枠組みを用いた対応を行うことが試みられていた。そこでは、入学後早期に全生徒に対する学力スクリーニング検査を行うという面や、生徒の学力や出席の実態を継続的に評価するという面が、RTI の優れた点として取り上げられていた。一方で、複数の層を移動する中で、通常教育と特別教育の断絶をつなぐという面については特に期待は示されなかった。このような見解は、初期より RTI を支持していた研究者の論考にも一部見られた。

以上をふまえると、障害に限らない様々な事情から学校教育への適応に困難を抱える

子どもたちについて、その実態を早期につかみ、学力向上や素行改善へとつながる支援を提供しうる校内システムとしての意義が、RTI に新たに期待されていると考えられた。

(1)～(3)で示したように、RTI は学習障害児の識別や支援について、通常の読み書き能力の問題と地続きの部分でとらえることにつながるような研究をその背景として持ち、他方で学習障害の生理学的、神経学的基盤の解明を重視する立場からは早期より疑問が出されていた。さらに、現在では学習障害児教育とは異なるところから注目されつつあり、その背景には学力向上や素行改善といった学校教育全般に関する問題の解決への期待が寄せられていた。このような中で、RTI による学習障害識別への期待は低下しており、支援提供機能のうちの一部について活用の可能性が期待されるという事態に陥っていた。

なお本研究においては、1 年半の研究期間の中で、過去の研究成果と現在の RTI を比較するという目的のため、当初は学術雑誌に発表された論文を中心に検討することを想定していた。しかし、研究を進めていく過程において、ハンドブック類や各種団体の報告書類、さらに学会議のペーパー集なども同時に収集・検討することが必要であると判明した。これらの資料については、所蔵機関が海外に限られているものの中に未収集分が多くあること、また一部収集を完了したものについても、検討期間が十分に取れず、概要整理にとどまること等の問題が残されている。今後は本研究の成果を土台として、これら一次資料類のさらなる収集と分析を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①羽山裕子「アメリカ合衆国における中等教育段階の生徒を対象とした Response to Intervention に関する一考察」『SNE ジャーナル』第 21 号、第 1 巻、2015 年、pp.144-156
- ②羽山裕子「アメリカ合衆国における Response to Intervention 導入期の論点に関する一考察—2003 年 Response to Intervention シンポジウムでの議論に焦点を当てて—」『国士館人文学』第 6 号、2016 年、p.1-19

[学会発表] (計 2 件)

- ①羽山裕子「米国における Response to Intervention の展開」日本特別ニーズ教育学会第 20 回大会自由研究発表 (於茨城大学) 2014 年 10 月 19 日
- ②羽山裕子「1980～90 年代アメリカ合衆国の学校教育における多層的な介入システムに関する検討—特別なニーズを持つ児童・生

徒への早期支援に焦点を当ててー」日本教育
方法学会第 51 回大会自由研究発表（於岩手
大学）2015 年 10 月 10 日

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 羽山裕子 (HAYAMA, Yuko)
国士舘大学・文学部・講師
研究者番号：20737192

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし